

# 細胞診指導医会 会報



No.14 Nov. 1995

## 日本臨床細胞学会の発展と第 37 回総会の特色

第 37 回日本臨床細胞学会会長 西 谷 巖

日本臨床細胞学会が発足したのは、昭和 37 (1962) 年であり、その第 1 回総会の参加会員数は 200 名前後であったと記憶しています。しかし、日本婦人科細胞学談話会や東京細胞診研究会あるいは各地に芽生えてきた細胞診同好会などより多くの入会者をえて、細胞診断学を中心に細胞学の研究領域を広く包括して、ユニークな学会が形成されました。また、時宜をえて昭和 40 年頃より細胞診による子宮癌検診が全国的に広く普及するようになり、学術研究に加えて社会医学的にも本学会の意義は大きく、発展の一途を辿ってきました。

現在では、会員数 8606 名 (医師会員 4093 名、技師会員 4446 名) を擁する巨大な学会に成長しました。これまでの 36 回の歩みをみると、歴代の会長はじめ関係者の努力によって、研究的・教育的価値の高い招請講演、特別講演、シンポジウム、ワークショップ、さらに会員の研究発表も毎回 300 題以上に達しています。そして活発な学術集会の一部始終は、毎年学会誌の各巻 2 号に掲載されています。本学会のスタートと軌を一にして 1962 年第 1 回国際細胞学会議 (IAC) が、オーストリア、ウィーンで開催されました。じらい、本学会は国際交流も盛んになり、IAC への参加数は、

世界各国を凌駕しています。本学会の細胞診指導医認定制度によって 1386 名 (1995 年現在) の指導医および細胞検査士試験合格者は、4725 名 (1995 年現在) に達し、全国各地で活躍しており、これらの中から、国際細胞学会議の正規のメンバーとして FIAC・MIAC がそれぞれ 96 名、94 名の細胞診専門医が認定されています。わが国の細胞検査士の技術水準は、国際的にも高く評価され CT (IAC) は、3249 名 (1995 年) に達しています。

さて、日本臨床細胞学会の 21 世紀への展望は、いかにあるべきか。第 37 回総会は、現状を十分に把握し分析して、今後の方向を明らかにする里程標になることを期待したいと思います。

平成 8 年 5 月 30 日より 3 日間にわたって、盛岡市において開催されることになりましたが、われわれ主催者一同、誠に光栄であり、第 37 回総会の成功を期して目下鋭意準備をすすめています。日に陰にご指導、ご鞭撻を賜った理事、評議員および会員一同に心から感謝申し上げます。

この学術集会は、細胞学とりわけ癌細胞研究の広い領域を視野に 21 世紀の高度の細胞診断学を確立するステップにしたいと考えます。最近の四半世紀は、細

胞生物学, 分子細胞遺伝学あるいは免疫学などに驚異的な進歩をもたらし, 先端的知识や技術が多数集積されましたので, これらの細胞診へのフィードバックは, 本学会の崇高な使命であります. このような観点から, まず, 「細胞診へ応用できる新知見」を学術シンポジウムの課題とし, 全会員の関心を集めたいと思います. また, 特別講演には, 「癌化と老化」をとりあげ今日のテーマとしました. 招請講演は, 形態学を越えたサイトメトリーの分野から ① イメージサイトメトリーと ② フローサイトメトリーの興味ある話題を探しているところです. また, 要望された講演テーマには, ① 細胞診断と画像診断, ② 悪性腫瘍の機能分化と細胞診, ③ 酵素抗体法と *In situ* hybridization, 教育講演には, 細胞診への FISH 法の応用をとり上げる予定です. もう一つの学術シンポジウムとして子宮頸部異形

成の細胞生物学をとりあげました. また, 細胞診指導医と細胞検査士との接点から「細胞診の報告様式をめぐって」を教育シンポジウムの課題としました. さらに, ワークショップとして ① 細胞診とアポトーシス, ② 穿刺細胞診の価値と限界, ③ 内分泌療法と細胞診の3題を選定し, 公募演者を含めて, 活発な討論が行われるよう企画したいと思います. さらに, 細胞検査士会の要望シンポジウムとして「腺型細胞診シリーズ—子宮内膜」としました. 多数の会員の皆様の研究発表もお願いし, サイエнтиフィックなサウンドのひびきわたる学術集会になるよう, 重ねてご指導, ご協力をお願いいたします.

5月のみちのくは, 新緑にエキゾチックな街並みの映える好季節です. 多数の会員の皆様の参加を心から歓迎いたします.

## 東京細胞診研究会から日本臨床細胞学会 東京都支部への道程

東京都予防医学協会保健会館クリニック 原 島 三 郎

東京の文京区にある地下鉄茗荷谷駅を出ると正面にエーザイ別館があり, その前を右手に進み桜大通りを通り過ぎると小日向4丁目の角に出る. そこで左に曲り坂を下ると両側にエーザイの建物がみえてくる. 左手の方の建物の5階にエーザイホールがあり, そこが東京細胞診研究会の恒例の会場であった. 東京細胞診研究会は下谷の御徒町で胃腸科を開業されていた黒川利雄先生の直弟子であった津田一彦先生, 順天堂大学第1外科の信田重光先生, 東京医科歯科大学の山田喬先生, 東大分院外科の城所 功, 阪 達先生, 東京逋信病院の藤原都夫先生, 慈恵医大の清水 進, 久田忠男先生, 千葉大の沢田勤也先生らの細胞診研究の先達グループが昭和34年頃から集って研究発表や討論をしながら細胞診断学の樹立と普及を目指していた会であった.

私も東京細胞診研究の世話人をしたことがあったが, そのとき外科系細胞診の座長をお願いしたのが, 東大分院におられた林田健男先生であった. 林田先生はその後第9回日本臨床細胞学会会長の任を果された方である. 私が癌研附属病院を退職し東京都予防医学協会に移ってから林田健男先生の息子さんの順天堂大学第1外科助教授の林田康男先生と知り合い, いろいろな患者さんの診療をお願いしているが, 林田康男先生は私が始めてお会いした頃の林田健男先生とそっくりなので, 両先生のお顔をダブらせながら紹介状を書

いている.

東大分院といえば, 昭和30年頃東大分院で行われた内科系の研究会に出席したことがあった. 会が終わって入口に戻ろうとしたら通路が曲っていてどちらに行ったら良いか迷っていると, 年配の先生が通りかかった. そこで入口の方向をお尋ねするとご自分で入口まで案内して下さいました. 東大にこんな親切な先生がいらっしゃるのかと感激したが, その先生が福田 保先生であった. 福田 保先生は昭和27年に東大から順天堂大学外科教授になられ, 信田重光先生や沢田好明先生を指導され消化器細胞診開拓のために多大の功績をあげられた方であり, 順天堂大学に赴任された後も東大分院外科の行事に時折参加されておられたとのことで, その折に私がお会いしたものである. 私は昭和43年11月23日付で細胞診指導医認定証第7号を頂いたが, そのときの日本臨床細胞学会会長が福田 保先生で格調高い先生の署名をみるたびに心が引締る思いがするのである. 福田 保先生は国内の細胞診断学の発展にご尽力下さっただけでなく, 広く国際的視野のもとに細胞診断学の確立と普及を願われておられ, 国際細胞学会へも第3回より毎回出席されておられた. 昭和49年5月に米国マイアミで開催された第5回国際細胞学会に出発される前に, 肝硬変による腹水貯留が始っておられたので, ご自分で「これが最後の旅でしょう」とおっしゃられて出発された. 学会旅行中は福田

先生のご長女、お孫さんと信田先生ら門下生が行をともにされ、学会日程、帰り途のハワイでの浜辺の休息などすべて果されたのち、帰国されて2ヵ月後7月11日に82歳で逝去された。福田 保先生の最後まで尽きることのなかった学問への情熱と終生変ることのなかった温いお人柄に対して私は心からなる敬意を持ちつづけている。

あるときお茶の水で東京細胞診研究会の消化器関係のメンバーが集ったことがあった。用事が終わってもまだ時間が早かったので、山田 喬先生が東京医科歯科大学時代から愛用されていた駅の近くの飲屋に行くことになった。山田先生の案内で垣花昌彦先生、奥井勝二先生、沢田好明先生、信田重光先生と一緒に狭い飲屋に入っていくと、その店はアンキモが名物とのことでそれを食べようということになった。できたアンキモはアンコウの肝臓で、ちょうど旬であったらしく酒に合い「おいしい、おいしい。」といて皆で食べた。私はアンキモとの初めての出会いであったためか、食べている中に加藤秋邨の有名な俳句である、

鮫鱈の骨まで凍ててぶちきられ  
が心に浮んできたことを覚えている。

東京細胞診研究会のメンバーは、癌研附属病院婦人科部長で後に院長になられた増淵一正先生、関西医大産婦人科教授の水野潤二先生を中心に昭和36年頃から発足していた日本婦人科細胞診談話会のメンバーと合同して、昭和37年に全国的組織として日本臨床細胞学会を成立させた。

日本臨床細胞学会を縁として、増淵一正先生とは平成4年11月14日に先生が逝去されるまで公私ともにご指導を頂くことができた。天神美夫先生とは住所が同じ小金井市であったので良く声をかけて頂いている。栗原操寿先生とは、これまで3回の出会いがあった。最初は昭和27年の8月であった。私が東北大学医学部3年の夏休みの病院見学を東京都下福生町にあった福生病院にお願したところ、受入れて頂いて、医局の先生方の後について動き回った。午後ひまなときには病院の中庭に職員が集ってソフトボールを楽しみ、ときどきおこる珍プレーに結核病棟の窓で見物していた若い患者さん達が拍手喝采してくれたことがあった。そのときの婦人科の院長の下におられた新進気鋭の婦人科医が栗原操寿先生であった。その後専門が内科と婦人科と異なったためお互に会うことがなかったが、日本臨床細胞学会に出席したら、慶應の婦人科細胞診の指導者の栗原先生があつた福生病院におられた栗原先生であるとわかり、婦人科細胞診の特徴などについて教えて頂いたことがあった。

ところで昭和63年に私が癌研付属病院を退職して東京都予防医学協会に就職し、各部門に挨拶回りをしていたら、細胞診断科の顧問に栗原操寿先生がおられ3度目のお付合となった。現在は栗原先生に保健会館クリニック婦人科と東京都予防医学協会細胞診断科の

ご指導をして頂き、私の方は栗原先生の健康管理の一部を担当させて頂いている。栗原門下の長谷川壽彦先生は日本血液学会の長老の1人であられる長谷川彌人先生の息子さんなので、父子2代にわたっているいろいろとご教示が頂けて有難いと思っている。

東京細胞診研究会は日本臨床細胞学会が発足した後も東京地区の細胞診研究会として、ときどき会合を続けていたが、昭和57年12月16日第53回研究会をエーザイホールで開催し、技術開発の手技について畠山、推名、臨床について杉下、大塚、鳥屋、坂井、沢田の各先生が講演し、クラミジアについて千葉大の武田先生が特別講演をされ、加藤治文先生が閉会の辞を述べられたのが私が出席した最後の会であった。

さて昭和56年頃老人保健法の第一次計画が企案されていた。そして法案が成立すると子宮頸癌と胃癌の集団検診が実施されることになっており、次の第二次5ヵ年計画では肺癌検診が加わる状態となってきた。これらの検診に際して無資格者が細胞診を行うことは精度管理上好ましいことではなく、一定のレベルで検診が行われるように指導するため各都道府県に精度管理のための協議会が設置されることになったので、これに対応するためには各県単位の受皿としての細胞学会支部が必要となった。また各県の枠内での医師会員と技師会員の研鑽と交流を計る必要性も認められており、すでに30支部が発足していたので、東京都でも支部設立の動きが東京在住の細胞学会理事である、天神美夫、栗原操寿両先生を中心に始まった。

昭和56年9月10日に天神美夫、栗原操寿、早田義博、坂井義太郎、久保久光、岩田正晴、石束嘉男、上井良夫の各先生が第1回東京都支部設立世話人会を開いて東京在任の細胞学会理事、評議員70名に東京都支部発足の賛否を問い合せることを決めた。同年10月6日に東京都がん検診センターで坂井義太郎先生を中心にして14人が集り、東京都支部会則案の検討を行った。同年10月30日に坂井義太郎先生および世話人が集り、東京都支部会則施行細則を検討し、東京都支部設立申請書を日本臨床細胞学会会長宛に提出することを決めた。そして昭和57年1月23日付で日本臨床細胞学会会長榎木 勇会長より東京都支部認可の連絡があった。これを受けて同年3月11日に坂井義太郎先生は「早春の候となり皆様におかれましては益々御健勝に御活躍の御事大慶に存じます。」で始る入会案内を東京在住の細胞学会会員に発送した。同年4月16日に世話人会を開き第1回東京都支部総会を5月29日順天堂大学有山記念講堂で開催することが決った。同年5月15日には東京都支部発起人会が開かれ、支部長の任期は1年で再任不可、幹事の任期は2年で再任可、学術集会の費用は支部長が決済し、東京都支部の経常収支とは別扱いにする。支部事務所は東京都がん検診センター内に置くことなどが決った。同年5月29日の第1回東京都支部総会では約150名が参加した。支部長は

坂井義太郎、庶務幹事代表は天神、栗原、幹事は筒井、垣花、平田、松原、学術幹事代表は石東、上井、幹事は福島、横川、原島、杉下、山岸、武智、会計幹事代表は久保、幹事は沢田、石田、藤ノ木、広報幹事代表は岩田、幹事は田野、加藤、野沢、国実、会計監査は早田、金子のメンバーで発足した。同年10月22日に同じ順天堂大学有山記念講堂で第1回東京都支部学術集會が行われ、約170名が参加した。

東京都支部の運営についてみると、坂井義太郎先生の次に癌研附属病院婦人科の久保久光先生が昭和58年度の支部長となり、学問的進歩と会員相互の親睦の場を培うことを支部運営の理念としてかけ、具体的な事業として第1巻1号の支部会報を発行した。また支部事務所を東京都がん検診センターより新宿区市カ谷砂土原町1の2にある東京都予防医学協会細胞診断科に移動する手続をし、武智、土屋、楠、吉田の4名が事務処理にあたることになり、東京都支部の運営は軌道に乗ったのである。この頃の東京都支部の医師会員は174名、技師会員は317名であった。昭和59年度の支部長は上井良夫先生、昭和60年度は福島範子先生、昭和61年度は岩田正晴先生であった。昭和62年度は私が支部長をつとめ、学術集會は日本都市センター第2講堂で行ったところ、熱演がつづき、閉会時間が遅れ、夜間の借用料分が追加となって会計は赤字となり、福島先生ときは黒字で支部事務所にワープロを寄付されているが、私ときはそのような記念品を残すことはできなかった。昭和63年度は垣花昌彦先生、平成元年度は沢田好明先生、平成2年度は大塚俊通先生、平成3年度は杉下 匡先生、平成4年度は野

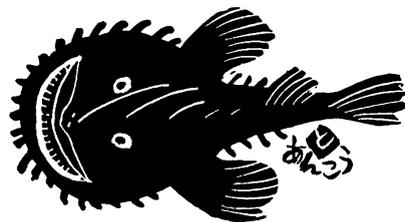
沢志朗先生、平成5年度は加藤治文先生であった。

平成6年度の支部長は坂本穆彦先生で、この頃の東京都支部会員は約800名で日本臨床細胞学会会員8141名の約10分の1を占めており、学術集會には220~250名が参加するようになってきた。その年の学術集會の席上で私は支部の功勞顧問に推載されるとのこを坂本支部長より連絡されており、さらに次の年には日本臨床細胞学会評議員を退任する予定になっていたので、私の細胞学会活動は1つの節目を迎えたと考え、記念の旅行でもしておこうかと考えた。ちょうど平成6年3月に予防医学事業中央会の用事で宮崎市に行く機会ができたので、西都原古墳群をみてから高千穂に行くことにした。宮崎より延岡を通り、単線の高千穂線にゆられること1時間半で山合に忽然と出現した高千穂町をみて秘境にきたことを実感した。その日は夜神楽を楽しみ、翌日は天の岩戸神社、高千穂峽を歩き、国見峠に立ち祖母山や高天原を眺め、日本人のルーツの地に触れて帰ってきた。

祖母山を春の霞の中に見る  
馬貝出づし古墳の上に鱗雲  
千年の齡の神木木の芽吹き

平成7年6月9日千葉県文化会館で行われた第36回日本臨床細胞学会総会で山口 豊会長より、私は功勞会員の推載状を頂いた。雨の学会場をあとにして坂を下りながら、細胞診断学の発展した最も良い時期に学会活動をすることができて良かったとの思いを心の中にかみしめた。

紫陽花の色や薄れし雨の後



# 第12回国際細胞学会に出席して

## ——本学会への日本の貢献——

都立府中病院産婦人科 和田 順子

第12回国際細胞学会が1995年5月21～25日までマドリッドにて開催された。さわやかな晴天に恵まれた5日間でもあった。学会はM.ビボ IAC 会長, M. J-アヤラ (スペイン細胞学会会長) 会長のもとに運営され, 参加国は60に及んだ。プログラムにはカルロス国王ご夫妻のサインの入ったお写真があり, また同国の厚生省をはじめ関係官庁や政界要人の協賛が明記されていることから, 本学会が国家レベルで多大の支援を受けて開催されていることがわかる。IAC 副会長の信田重光先生のお話によると, 登録時の参加者は1100名ほど。この内訳は日本212, スペイン197, 米国128, ドイツ43, ブラジル39, オランダ37, 英国36ほどであったが, 開催時には参加者は1300人に至り, 日本人参加者が第1位であった。これは第11回メルボルン, 第10回アルゼンチン, 第9回ブラッセル学会に続く実績で, わが国における臨床細胞学のレベルと関心の高さを示すものであろう。

フラメンコやトレアドール, 坂本駐スペイン日本大使公邸に参加者の全員がご招待をいただき, お心づくしのおもてなしを受けたこと (写真1) などはほかの機会に譲ることとして, 本稿においては国際細胞学会の報告を, その焦点を本学会と日本の関わる部分に当てることで思い返すことにしたい。

この学会における日本人の活動状況をみると, 日本臨床細胞学会からも協力が行われて, 事務局メンバーとして北尾 学, 山口 豊両先生が, プログラム委員会には加藤治文, 野沢志朗両先生が参加されている。一般演題においても口演発表が総数171演題のうち48 (29.1%), 示説発表は243演題のうち67 (25.5%), 合計すると全演題の27.2%が日本からであり, 一国としては最多数の採用であった。

また教育講演 (コングレスレクチャー) は8題が設定されていたが, このうち2題が日本からであった。それは(1)野沢志朗先生による “Novel Enzyme-Immunoassay for Endometrial Cancer Using Cytological Specimens”, また(2)坂本穆彦先生は “Some Diagnostic Problems of Thyroid Tumors on FNA” と題したもので, いずれも先端領域で注目されている最新技法をたくみにとり入れて展開されたライフワークの一端を紹介されたり, また日常的に遭遇する診断上の問題点をわかりやすく説明されたご講演として, 高い評価を得ておられた。

パネルシンポジウムは25題が設定されており, うち



写真1 坂本大使公邸パーティー会場

2題の座長を担当されたのは(1)加藤治文先生の “Panel on Respiratory Tract Cytology”, (2)信田重光先生の “Panel on Cytology of Gastro-Intestinal Organs” であった。パネーリストは医師, 技師を合わせて17名が日本から選出されており, それぞれ好評を得たとうかがっている。筆者はそのすべてを拝聴したわけではないが, 婦人科領域のパネルはいずれも内容の濃い, 誠実な研究結果が発表されていた。パネーリストは佐藤信二 (MD), 山内一弘 (MD), 馬場雅行 (MD), 蔵本博行 (MD), 海老原善郎 (MD), 工藤隆一 (MD), 大村峯夫 (MD), 小中千守 (MD), 広岡保明 (MD), 城下 尚 (MD), 安達博信 (MD), 西谷 巖 (MD), 柏村正道 (MD), 小林忠男 (CT), 安松弘光 (CT) (順不同) の各氏が担当された。

表彰にかかわった方も多い。今回が第1回目である増淵一正賞はL. G. コス先生に贈られた。1960年に設立されたM. ゴールドブラット賞はこれまでに40名, うち10名が米国, 6名が日本, ドイツが4名, カナダとスウェーデンがおのおの3名に授与されており, 日本は米国に次ぐ第2位である。本年は野田起一郎先生が受賞され, “Morphogenesis & Genetic Alterations in Uterine Cervical Cancer” と題する記念講演をされた。また1993年以降M. ゴールドブラット賞, G. L. ウィード賞, J. W. リーガン賞の記念講演には野沢志朗, 天神美夫, 加藤治文先生が座長の労をとられた。

これまでのゴールドブラット賞受賞者にうかがうと, 表彰は賞状のほか, 副賞としてのお祝い金とメダルが贈られている (信田重光先生ほか全員)。受賞に際して全員が内外の多数の会員から祝福を受け, 感激されたとのことである。これに加えて高橋正宜先生はL. G. コス教授からのお祝辞とともにご一緒に記念撮影

をされている。また田中 昇先生はテレビニュースで大きく報道され、県知事からののお祝いや記者会見への対応などで、その受賞の重みを改めて感じておられたなど、それぞれにすばらしい思い出を語って下さった。

本賞の受賞者として後輩のわが指導医会会員に対するご助言は

「やはり業績の大きさは非常に大切」

「学会首脳部は一般演題のセッションにもマメに出席して情報を得る努力をしている」

「審査委員は会員の活動状況に強い関心をもっており、特に候補者の実績については熟知している」  
「IAC に対する活動が客観的、かつ正当に評価されると聞き及んでいる」

「国際細胞学会によく参加、演題発表を通じて仕事の内容を世界に知らしめる努力が必要である」

「パネル、コンgresレクチャー、スライドセミナーなど学会行事への積極的な参加が大切」

などなどであった。

そしてこれにより「21世紀の細胞診を担う若い指導医の受賞者が続出するようその活躍を祈る(全員)」との熱い応援と期待をいただいた。

また国際細胞学会技師賞は1975年から設立されているが、これまでに21名の受賞者があり、うち日本が7名、米国が5、オーストラリアが2、以下イタリー、オランダ、ドイツ、英国などがおのおの1名と続く。本年は安松弘光氏が受賞された。同氏の受賞記念講演には山口 豊先生が座長として参加された。

受賞者にうかがったところ、表彰は賞状に加え、副賞としてメダルとお祝い金が贈られている(池田栄雄氏ほか)。メダルには受賞者の名前とともに“Beyond the Call of Duty”と刻されているという(南雲サチ子、西 国広氏)。細胞検査士としての義務を超えて今までよく活動をされました・・・との意味かと思うが、昨日へのねぎらいと今日の輝き、明日へのさらなる期待が込められた美しい言葉である。メダルの中央には粒ダイヤが組込まれており(山岸紀美江氏)、オリンピックの表彰者のようにトリコロールのリボンがついていたが、平田守男氏は賞金でチェーンを購入したうれしい思い出を語ってくれた。本学会が3年ごとの開催であるため、今回一緒に受賞された小林忠男氏(1994年)と安松弘光氏(1995年)にはメダルはなかったそうで、お気の毒である。これには日本臨床細胞学会でなんとかフォローして差し上げたいと思うのは筆者だけであろうか。

参加者の立場から筆者自身の経験談をご紹介し、この学会の運営の一端を知っていただこうと思う。一般演題の示説“Utility of Cytology in Detecting NSOCS (Normal Sized Ovary Cancer Syndrome)”の抄録を平成6年11月に発送した。演題採否の結果により、その他の学会予定、登録の必要などから本学会からの連絡を待ったが、そのままに打ち過ぎていた。

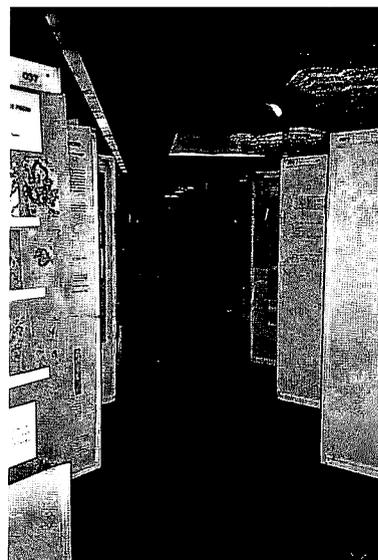


写真2 迷路のような示説会場

しかし開催日の1ヵ月前となり、航空券の購入や旅行会社への申込みなどの準備が限界に近い4月下旬に事務局から採用の知らせと演題発表に関する案内が送られてきた。ここには展示を行うための注意、すなわちポスターの大きさ、場所、展示および撤去時間などがあった。ボードの大きさは100×200cmであり、タイトルもこの大きさの範囲に含まれるから、くれぐれもはみ出すことのないようにと注意してあった。

展示開始は5月20日午後からとのことであったが、筆者は他用で出発が遅れたため21日午前9時頃会場に臨んだ。展示室は大きい、200cmの高さの屏風をジグザグに並べたという感じで、シャンデリアの光線もいくぶん遮られていた(写真2)。入室してきたスペイン系の女性が「オー、ラビリントー(まるで迷路)!」と肩をすくめたほどであった。すでに展示の7割は用意が整っていたが、驚いたことに与えられたボードの幅が5cmほど短い。また展示会場に用意されていた文房具は大きなスコッチテープ1巻とはさみ一丁だけであり、他国の出展者は黙々と、わが同胞はイライラしながら文房具の順番を待ち、ポスターの大きさを調整していた。筆者は運よく持参のテープで展示はできたが、ボードの大きさにポスターを合わせる苦労があった。

抄録の番号とポスターのそれはまったく一致しない。口演と示説発表の区別もされていない。プログラムの索引から探したところ筆者の抄録番号は451、展示ボードの番号は87で、このようなソーティングは日本の学会では経験しないことである。そういうクレームがあったのか、学会開始後に係員があたふたと抄録番号とポスター番号のラベルを貼付けていた。

閉会式では次期IAC会長に推挙されたD. ローゼンバーグ氏の挨拶と彼女を支えるスタッフが報告され、紹介された。日本からの会員の登壇やスピーチはうれ

しいものである。私事になるが、ローゼンバーグ氏と筆者は同門という関係にある。すなわち彼女はミルウォーキーカンテイ総合病院病理学教室においてレジデント研修をうけており、筆者は彼女とすれ違いに同教室でトレーニングをうけた。二人にとって益川照夫先生も指導者のお一人であった。彼女はカンサス州出身、FBIに勤務された父上の影響で心身ともに強健な、努力家であると聞いている。彼女は気さくで明るい一面を有する親日家でもある。以前、栗原操寿先生が会長を、長谷川壽彦先生が事務総長を務められた国際細胞診断学東京チュートリアルにおいて、乳房細胞診の実習を担当した彼女に、筆者が助手として参加したことがある。その終了後に都市センター会館の地下

食堂で、彼女の好きな鉄火どんぶりをいただきながら、二人だけの同門会を持ち、共通の指導者や友人たちに思いを寄せた楽しい時間を持った。お互いに「ヨリーコ」「ドッテイ」の間柄になった。今回の会長就任を心から祝うとともに、先輩である彼女の活躍を期待し、重責を全うされるよう祈る気持ちで一杯である。

次期、第13回国際細胞学会会長を担当される加藤治文先生から、時期は1998年5月10～14日、東京新宿の京王プラザホテルで開催するとのご挨拶があった。臨床細胞学会、指導医会をあげて協力し、実り豊かで心あたたか、優しい気遣いに満ちた学会であってほしいとその成功を祈った。

## どじな話

賛育会病院 垣花昌彦

### (1)

スペインのマドリッドで開かれた国際細胞学会に参加し日本に帰ってきた今、スペインについての大量の本を漁り猛烈に勉強を始めた。どじな話である。そんなことなら、行く前に勉強しておけば良いものを泥棒が去ってしまってから縄を絢うようなものである。

しかし、これには理由がある。そもそも、今回のスペインの学会が決まったときから、私は、スペインについて十分知っているつもりであったのである。

歴史でいえば、無敵艦隊が、英仏連合に破れるまでは、日の沈むことのない帝国といわれたことは知っているし、スペインからコロンブスがアメリカ大陸に到着したのが、ヨーロッパのアメリカ侵略の始まりであり、マヤ文化を滅ぼしたのはスペイン人であることは知っていた。つい最近までは、フランコという独裁者がいたということも知っている。“ドンキホーテ”を書いたセルバンテスは有名であるが、“セビリアの理髪師、フィガロの結婚”に始まり、“カルメン”は愛読書であるし、シェラネバダはヘミングウェイの“日はまた上る”でお馴染みである。

ピカソ、ダリ、ミロは最も好きな画家であるし、ゴヤの版画展に通って感激を味わったことがある。エル・グレコ、ベラスケスは是非みなければならない作品であることも承知していた。タピエスはミロに継ぐアブストラクトの巨匠だし、最近では、リアドの展覧会へ行って、彼のサインを貰ったこともあった。バルセロナにあるガウディの未完成のサグラダファミリ

アの建築に日本人がかかわって建築が進行してきたことも知っている。それにバルセロナのオリンピックははまだ記憶に新しい。

“三角帽子”、“恋は魔術師”、“アルハンブラの思い出”、“アランフェス交響曲”、“マラゲニャー”。荘村清志氏の弾く10弦のスペインギターは好んで聞く音楽の一つである。

また、最近最もしばしば行く料理屋は、スペイン帰りのシェフのいるバルセロナというスペイン料理屋である。

こんなわけで、スペイン通を任じており、スペインは身近な国と思っていた。簡単な案内書があればスペインは足りると思っていた。

どっこい。聞くとみるのは大違いである。未知との遭遇という言葉はこのためであったかと思うほどであった。どじなことである。最初にマドリッド到着は、夜遅くで何もみえず、翌朝、スペイン第1の都会マドリッドの観光をおえて、グラナダに向かう飛行機の乗るまでは普通のヨーロッパの風景であった。

ところが……。機がグラナダに向かって下降を始めて、山とそれに続く斜面をみて驚いた。山肌に木がないのである。荒涼として、石と岩と茶褐色の土が凸凹に連なっている。ときたまみえる緑らしい塊は、大きな間をおいてぼつりぼつりと生えている灌木状のオリブだけである。ヨーロッパに砂漠があったのかとびっくりした。そういえば、ナポレオンはピレネー山脈を越えたらアフリカだといったという。その気持ち

がわかる。まさに異質の景色である。グラナダの空港に降りても周囲は茶褐色のなだらかな丘陵に取り囲まれ、その先にシエラネバダの山脈が壁のように空間を遮っている。そのシエラネバダも裾は岩肌で、その上の頂上には残雪が夕日に映えて輝いている。この光景には人の気配が感ぜられない。生命の気もない。SF、いやまさにシュウルリアリズムの世界である。若い頃からシュウルリアリズムのダリの絵が好きで、この世から外れた裏の意識の世界の探索にあこがれていたのだが、あの絵はすべて現実の世界であったのだ。

車の行く街道沿いには、何千、何万というヒマワリがうねるような丘陵一杯に広がっている。黄色い花が高さをそろえて同じ方向に向かって、風に揺られている。こうなると綺麗というより不気味である。その反対側の山並には、広い間隔をおいてどす黒い緑のオリブが茶褐色の土肌に点点としながら連なり、無限に広がっている。行くうちに、これがとぎれると何もない土肌が続く。

長い行程にわれわれ以外の人影がない。通り過ぎる車は少なく、広大な荒野の中で小さく沈んでしまう。そして、緑のない山がうねって続いている山間を行くと突然低い家並みと茶色のスペイン瓦とくすんだ灰色の壁の家からなる集落が現れる。その中心に教会の尖塔だけが飛び抜けて高く、空を刺すように立っている。そんなちいさな部落をスッと越えると、また荒野が続く。このような風景が、旅の終りまで、車窓に連なっている。

こんな景色と土地柄をみると、スペインの文化も人も歴史もすべて考えなおさなければならないのではないかという思いが心の底に疼き始めた。

しかも、グラナダを起点として旅行が始まってみると、この自然のおそろしさに加えて、人種の渦という複雑さが絡まり始めた。アルハンブラの宮殿自体がもともとアラビア人のもので、カソリック教徒が奪ったものであるらしい。そこに加えて、ユダヤ人、ジプシーが絡んでいるということがわかってきた。ベラスケスの革命的な絵とアメリカにおけるスペイン人の残虐さがどうしても結び付かなかったのがこの民族のつばをみて何となく解るような気がし始めた。これは、その土地へ行かなければ判らないことである。

そのことを十分に見極めようとしていたそのとき、また、どじな事件がおこった。

## (2)

セビリアの4星のホテル、メリア セビリアからの出発の朝、部屋の前に出した私のトランクが盗まれてしまったのである。言い直そう、一行のうち、私のトランクのみが消えてしまったのである。この旅行はS社の企画でスペインの中では、×××社という現地の旅行社がガイドを勤めていた。付き添いのガイドはフランス人と結婚している日本人女性で、博識な語り口

とユニークでユーモアある説明でベテランのガイドと感じさせ、私たちを魅了していた。その彼女がマドリッドの朝の出発から携帯トランクは出発のとき部屋の前に出しておくようにというのである。カナダ、オーストラリアでは、泥棒の危険があるので部屋の外には出さないで、部屋の中でボーイに渡すようにいわれていた。そこで、ガイドの言葉を奇異に感じたのでわざわざ、大丈夫かと尋ねたところ、ここはヨーロッパで、当たり前だといわれた。スペインの泥棒のことは聞いていたので不安を感じてはいたが、当地のガイドのいうことだと考え直した。確かに、マドリッド、グラナダでは無事であった。

学会前旅行の最後のセビリアの朝、いつものように、トランクを9時10分前に部屋の前に出すようにいわれた。そのとうりに用意し、部屋の前に置いたまま、チェックアウトの会計のためフロントまで降りた。9時に、荷物集めにボーイが回ったがそのときには、われわれのトランクはなかったという。出発のチェックのとき、トランクのないことに気付いて、ホテルのコサージュは青くなって走り回った。ガイドも驚き、われわれはびっくり仰天した。トランクの中には、大きな金目のものはなかったが、翌日発表する原稿、スライド一式が全部はいつていたのである。また、練習のためにアメリカ人に原稿を読んでもらって吹き込んでおいたテープがはいつていた。

トランクの消滅を聞いてわが耳を疑った。そしてガクガクと青くなった。原稿やスライドなしで学会発表ができるほど英語にタフでない。明日の発表のことが頭の中で渦を巻いた。

今までは、海外の学会発表のときは、発表原稿やスライドは身近かに持っていくのが常であった。今度も、スペインまでの飛行中は手持ちのバックに入れて大事に携行した。発表前の旅行だから、夜には練習をしようと思い、持ってきたのである。そして、この旅行はバスと列車だから行方不明になることはあるまいと考えて、最後にトランクにいれたのが運の尽であった。

トランクがないことが解って、初めに慌てたのは、ガイドさんの方である。当時、ホテルに日本人の団体を含めて3つの団体はいつており、みなわれわれの前に出発していた。彼女は、トランクの紛失が解る前、それらの団体の出発を見送っており、日本人のガイドがスペイン語でなく英語で運転手に話しているのをみて、危ないなと思っていたという。そこで、彼女は、てっきりこれらの団体に紛れ込んだと信じてしまった。そしてこの団体の追跡に掛かったのである。3つの方向に走った団体をタクシーで先回りしてつかまえ、それぞれの観光バスのトランク倉庫を全部明けさせてみたという。ところがそこには私のトランクはなかったのである。ホテルで盗まれたのが決まってしまった。日本へ帰って、スペイン通に聞くと、それはホテルの従業員の仕業に違いないという。なるほど、

そうでなければあの時間にトランクを持って消えられるはずがない。そのスペイン通の話ではこんなことは昔から頻繁に起っていたともいう。後から聞いた話だが、この学会の別なツアーでもトランクが盗まれたということだ。土地の旅行社がそれを知らないなんてどじな話だ。ガイドがトランクを追って走り回っているとき、土地のガイドがついてセビアの観光をしたが、私はほとんど上の空であった。昼の食事も何であったか覚えていない始末である。何も解らないままマドリッド行きの特急に乗り、次のコルトバで、ほかの団体を追っていたガイドが乗り込んできて、はっきりと紛失が確定した。ともかく、トランクと原稿が出ないと解って、翌日の準備に掛からなければならない。困惑と絶望が頭の中を走り回った。

空白になった頭で車窓に走る荒れ果てた丘陵を眺めていると、突然、発表原稿を東京の自宅のワープロにいたままにしてきたことを思い出した。最近のワープロは電源を切ってもファイルが消えない。それを送ってもらおうと考え付いた。しかし、息子も旅行中である。家には誰もいない。嫁いでいった郊外に住む娘に頼むほかはあるまい。しかし、あと2時間、マドリッドまではなす術がない。やっとマドリッドに午後4時到着。あと15時間しかない。マドリッドに着いてすぐ駅の公衆電話から、東京の娘に電話を掛けた。東京では夜の11時である。たたき起こされて眠そうな娘に、ワープロの使い方とFAXの送り方を教える。何とか納得させて、同行の先生方の待つバスに乗車、ホテルに着いた。ホテルに着いて、学会のオープニングセレモニーに間に合う時間はあったが、事後処理に走り回って式には出ることができなかった。とにかく疲れ果てて12時ごろ寝たが、深い眠りの中で、耳元の電話でたたき起こされた。FAXを送ったという娘からの電話であった。午前1時である。日本時間では、朝の8時であった。ホテルの電話室に降りてFAXをうけとって感激した。地球の裏側から来たとは思えない、きれいな印字の原稿である。やれやれこれで何とかできる。はさみと糊の継ぎはぎ細工を開始した。細胞像のカラーライドの説明部部分を切り除いて外し、表の部分は、オーバーヘッドプロジェクター用のライドを作成することにしてつなぎ合わせ、どうやら演説原稿をでっち上げた。癩に触ったから、冒頭部分に、

ライドと原稿をスペインはセビアのホテルで盗まれたから十分な演説ができないという文章を付け加えた。朝の4時であった。

ともかく一寝入りして朝起きたが、そのあとの準備が大変であった。なにしろスペインである。アシタ、マニアーナ\*註の国である。日本語に訳すと“明日間に合うよ”というのだそうである。今日は間に合わない国である。オーバーヘッドプロジェクターのライドは旅行社の人に頼んで作った。早速、それを学会場で使えるかどうか、学会本部のライド受付へ行って聞いたが、だれも知らない。少なくとも5人の人を経て、別の事務所の女性の名前を教えられた。この間、若い女性の本部員は英語を話すのが苦痛であるようであった。教えられて尋ねた中年の女性は学会場のことは知っており、会場のライド係がすべて知っているからそれに頼めという。そこで、会場のライド係に頼むと、彼のいうのには、“おれはコダックプロジェクターの係りだからオーバーヘッドプロジェクターは扱えない”という。オーバーヘッドプロジェクターはコダックの隣りにあった。だれがやるんだと聞くと“その辺の女性だ”という。その辺りの女性に聞くと“私は機械は扱えない”という。そこで、再びぐだんの取締のような女性にどうしたら良いかと聞く。結局、3回ほどあつちとこちちを行き来したすえに、会場ライド係が好意でやってくれることになった。やっと、発表が可能となったのである。スペイン学会のどじな運営にはあきれた。

これは、まさに、焦りと苦悩に満ちた30時間であった。唯一の救いは、会が終わって退場するとき、座長で旧知の Dr. Lindholm がライドがなくてもよく解ったとってくれた一言であった。

この事件のため、胃と心臓はおかしくなったし、聞きたい講演は逃した。それに、スペインを勉強しようと思立って、当地で買いあさった本と土産物がすべて消失した。

どじな旅行であった。

\*註：Hasta mañana は明日まで（また明日） till tomorrow の意  
アスタマニャーナ  
（まで 明日）



# 1994年度第2回指導医学会議事録

日 時：1994年（平成6年）11月17日（木）

場 所：宮城県民会館大ホール

出席者：669名

司 会：杉森 甫 指導医学会会長

議題に先立ち、1994年度第1回指導医学会議事録（案）が承認された。

## 議 題

### A. 報告事項

#### 1. 庶務報告（加藤治文 庶務担当幹事）

会員数：8,641名（医師4,117名，技師4,461名，  
図書63件）

指導医数：1,308名

FIAC：96名

MIAC：93名（含む，申請中）

CT（IAC）：3,249名

CT（JSC）：4,452名

#### 物故会員

指 導 医 No.1,038 小武家俊博先生

（尾道総合病院病理研究検査科）

医師会員 佐藤陽一先生（佐藤医院院長）

〃 大石 寛先生（大石医院院長）

技師会員 計良恵治氏（千葉大学医学部第2解剖）

黙 禱

#### 2. 1994年（平成6年度）指導医資格更新報告

（工藤隆一 指導医委員会委員長）

資格更新該当者：指 No.594～No.683

指 No.1,006～No.1,101

合計 186名

更新締切日：平成6年12月15日

#### 3. 1994年（平成6年度）指導医試験について

（桜井幹己 指導医試験実施委員長）

日 時：平成6年11月26日（土）

場 所：江坂研修会館（大阪）

総合科 35名 婦人科 54名

内科・外科系 10名 合計99名が受験予定。

#### 4. 1994年（平成6年度）第27回細胞検査士認定試験

について（長谷川寿彦検査士委員会委員長）

（第一次試験）

日 時：平成6年11月13日（日）終了した。

場 所：東京・大阪・福岡

872名が受験し、11月16日判定会議を行い

542名が合格（62.2%）

（第二次試験）

日 時：平成6年12月10日（土），11日（日）

場 所：日本都市センター（東京）

イ. 昨年度に比べ、本年度のスライド試験は高得点者が多く、平均点が上がってきた。

ロ. 平成7年度（第28回）の細胞検査士認定試験より、前年度二次試験で不合格の場合、翌年1年だけ一次試験を免除し、二次試験を受験することができる。

#### 5. 細胞学会渉外委員会報告

（杉下 匡 渉外委員会委員長）

登録衛生検査所の精度管理を完備するために厚生省の強い要望により、（財）医療関連サービス振興会が設立され、丸適マーク発行の一本化が実施された。指導医34名，細胞検査士15名の調査員を選し、全国を9ブロックに分けそれぞれに調査員を配置し立入検査を行う事になった。

10月1日より立入調査を行い、いくつかの問題が発生しているが予想通りの運営状況である。

立入調査の作業はなかなか面倒であるが、細胞学会の発展のために調査員の先生方のご協力をお願いしたい。

#### 6. 第12回国際細胞学会案内

（加藤治文 第13回国際細胞学会会長）

日 時：1995年5月21日（日）～5月25日（木）

場 所：スペイン マドリード

抄録締切：1994年12月31日

#### 7. 第13回国際細胞学会案内

（加藤治文 第13回国際細胞学会会長）

日 時：1998年（平成10年）5月10日～14日

場 所：東京・京王プラザホテル

#### 8. 会員名簿発行について

（垣花昌彦 情報処理委員会委員長）

1995年に細胞学会会員名簿の発行予定。

希望者は、郵送料450円切手を貼った葉書で申し込んでほしい（日臨細胞誌33巻4,5号に掲載）。

## B. 協議事項

#### 1. 細胞検査士資格更新審査委員会

（長谷川壽彦 細胞検査士資格更新審査委員長）

細胞検査士資格更新業務について

指導している検査士の資格更新では点数が満たされていれば、検査士カードに指導医が「更新可」と記載するが、点数が満たされていないのに更新を認めるという指導医がいる。検査士の資格更新を十分に把握してほしい。

#### 2. あり方委員会報告並びに提案事項について

（矢谷隆一 あり方委員会委員長）

1) 細胞検査士資格更新業務の取り扱いについて  
資格更新業務は、細胞学会会長から委託されて指

導医会の中の細胞検査士資格更新審査委員会が行っているが、細胞学会の諸制度審議委員会から業務を一本化して検査士委員会で行ったらどうかとの意見が出され審議されたが、あえて指導医会の中で資格認定業務を行っているのは細胞検査士を実際に指導しているのは指導医であり、検査士を一番把握しているのは指導医であるから、指導医会の中で行うべきであるという理念が多くの意見で従来通り、指導医会の中で行うことになった。

#### 2) 指導医会と検査士会との話し合いについて

指導医と細胞検査士のかかわりなどについてあり方委員会代表と検査士会代表が出席し、非公式の場で話し合いが行われているが、検査士会側より、公式な場で取り上げてほしいとの要望が出された。

当面は、あり方委員会代表と検査士会側代表で討議し問題点をあり方委員会で審議して指導医会に報告する形をとる。

#### 3) 指導医の複数制について

春の指導医会で細胞検査士に対して、専任の指導医と教育の指導医(複数でも可)が承認されている。専任指導医＝現行の指導医と同様に免許更新業務を担当。

教育指導医＝複数でもよい。各専門領域の先生に依頼する。

具体的な作業については、指導医会会長から細胞学会会長に報告し情報処理委員会で検討する。

#### 4) 指導医会の開催日と時間について

平成7年第36回総会時に指導医会を総会会長(山口 豊先生)のご厚意により、学会2日目の土曜日12時30分より13時30分に開催する。

学術講演会の時間がとれなくなるが、初めての試みとして一度実行してみることになった。

#### 3. その他

#### 1) 指導医会幹事を指導医会総務と改める。

指導医会世話人(藤本郁野先生、山内一弘先生)を指導医会幹事とする。

以上が承認された。

(指導医会規約改定の件)

1995年総会時の指導医会より実施する。

#### 2) 指導医会会費運営について

印刷費、通信費等諸物価の値上がりで1993年は、収入より支出が上回り約40万円の赤字であった。1994年度からは監事の先生に監査をしていただき、1995年春の指導医会で会費値上げ案(現在2,000円)を提案していきたい。

#### 3) 細胞検査士の健康調査について(猪狩咲子先生)

1991年までに認定された細胞検査士全員を調査  
細胞検査士3,661名 回答率49.67%

(調査項目)

- a. 目の症状
- b. 筋骨格系に関する症状
- c. その他

(結果)

- ・仕事の内容によっては年齢とはあまり差はなかった。
- ・作業量が増加すると年齢に関係なく、目に症状が起きたり、肩こり、腰痛が生じてくる。

以上についてアンケート調査を行ったが今後も1年に1回位実施していきたい。

#### C. 学術講演会

演 題：集団検診の現況と将来について

——とくに職域検診について——

演 者：杉下 匡

(佐々木研究所附属杏雲堂病院 婦人科)

司 会：柴田偉雄(指導医会学術担当幹事)

# 細胞診指導医会規約

## 第1章 名称

第1条 本会は日本臨床細胞学会細胞診指導医会と称する。

## 第2章 目的

第2条 本会は細胞診断実務に関する医師ならびに技師の教育・指導に当たることを目的とする。

## 第3章 会員

第3条 本会は日本臨床細胞学会会長が認定した細胞診指導医全員で構成される。

第4条 会員に退会または転勤などの移動のあった場合は、本会事務所に届出なければならない。

## 第4章 役員および監事

第5条 本会に会長・総務若干名および監事2名の役員をおく。

第6条 会長は総務の互選により選出され、学会会長がこれを委嘱する。会長は本会を主宰し、これを代表する。会長の任期は3年とし、再選を妨げない。

第7条 総務は指導医会員の互選により選出され、会務に関する重要事項を協議し実行する。総務の任期は3年とし、再任を妨げない。但し、選出時、被選出者は、満65歳を越えないこととする。指導医会会長は、満65歳以上の総務経験者の内、指導医会に特に功績のあったものに対し顧問の称号を与えることができる。顧問は、指導医会、指導医総務会へ出席できるものとする。

第8条 監事は本会の会計および会務を監査する。監事は、会長が候補者を推薦し指導医会の承認を経て決定される。任期は3年とし、再任を妨げない。

第9条 本会の業務を処理するため必要な幹事をおく。

## 第5章 事業

第10条 本会は次の事業を行う。

- 1 指導医による検査士指導の実体を把握し調整する。
- 2 日本臨床細胞学会会長の委嘱により指導医認定試験の委員を推薦する。
- 3 日本臨床細胞学会会長の委嘱により細胞検査士試験の委員を推薦する。
- 4 日本臨床細胞学会会長の委嘱により細胞検査士の資格更新の審査を行う。
- 5 その他

## 第6章 会議

第11条 本会は日本臨床細胞学会総会および秋期大会時に集会を開催する。

## 第7章 本会事務所

第12条 本会事務所は日本臨床細胞学会事務所内におく。

## 第8章 会費

第13条 本会の年会費は2,000円とし、入会金は3,000円とする。

## 第9章 規約の変更

第14条 規約の変更は指導医会出席会員の過半数(委任状を含む)の賛同を得て決定される。

## 附則

- 1 本規約は昭和60年5月30日から実施する。
- 2 昭和62年5月21日一部改訂。
- 3 平成4年11月12日改訂。
- 4 平成7年6月10日改訂。

## 細胞診指導医資格、業務および申請に関する施行細則

### 1. 指導医の認定

日本臨床細胞学会会則第3条4,および第21条による指導医の認定については、会長より委嘱された指導医認定委員会が下記の諸条件を基準として審査し、会長がこれを認定する。指導医の認定を希望するものは、下記の諸条件をみたした上で、所定の書式により、指導医認定委員会(本学会事務所内)に申請する。

### 2. 指導医の資格

- 1) 指導医としてふさわしい人格、識見を有するもの。
- 2) 医師であり、本会員歴3年以上のもの。
- 3) 細胞診の実務を5年以上経験し、年間2,000件

以上の検体を取り扱っているもの。

- 4) 日本臨床細胞学会の行う指導医試験に合格しているもの。
- 5) 細胞診断学に関する論文を原著として3篇以上発表し(うち少なくとも1篇はfirst authorであること)、日本臨床細胞学会における学会活動を活発に行っていると認められるもの。

### 3. 指導医の資格更新

指導医は4年ごとに資格更新の審査を受けなければならない。

### 4. 指導医の業務

- 1) 積極的に細胞診断業務に従事し、依頼された標

本については診断を行う義務がある。

- 2) 細胞検査士の教育, 指導監督を行う義務がある。細胞検査士の資格更新にさいしては, その可否について意見をのべなければならない。
- 3) 学会が主催する公開のカンファレンスまたはセミナーに出演を依頼された場合出席の義務がある。
- 4) 指導医は, 次の各項に該当した場合, 指導医の資格を失い, その業務を行うことができない。
  - (1) 日本臨床細胞学会を退会した場合

- (2) 理事会の議を経て, その認定を取り消された場合

- (3) 資格更新が認可されなかった場合

- (4) 本人が指導医を辞退した場合

#### 5. 施行細則の変更

本細則の変更は指導医会の承認を得なければならない。

#### 附 則

1. 本施行細則は, 昭和60年11月21日一部改訂
2. 平成7年6月10日改訂。



## 編 集 後 記

和田先生が本号に詳しく書かれている、第13回国際細胞学会がスペインのMadridで今年5月に、開催されました。編集後記にはこの学会での思い出を。

学会の3週間ほど前に日本外務省から国際学会に関する問い合わせ電話が細胞学会本部に入り、私が出たのが坂本スペイン日本大使公邸でのパーティー開催の始まりでした。この企画は今学会のDr. Ayala会長がスペインの日本大使館に学会参加の日本人を招待して欲しい旨を要請したため、このため現地から外務省に問い合わせがあったそうです。外務省から主だった日本人参加者の名簿を求められ、急いで各旅行社に問い合わせし名簿を作成し提出しました。このパーティーが開かれるのが決まったのは学会が始まる10日程前でそれから各旅行社に連絡したため、参加される方々への連絡がうまくいかず不安のまま現地に向かいました。現地ですぐ学会本部に頼みパーティーの案内を張り出してもらったり、各旅行社の現地デスクにも連絡を頼みましたが、結局パーティー出席予定人数がまったくつかめませんでした。このため学会場から大使公邸までのバス輸送に何台必要かわからないままで学会と交渉することになりました。はじめDr. Ayala会長は300人ぐらい参加されてもいいように7台用意しているという話でした。しかし、さすがスペインの話で、パーティー当日大使館事務官がホテルに連れられ、一緒に大会運営責任者にこの件について聞くと3台しか用意していないといわれ、慌てて再交渉し、50人乗りのバス5台を準備してもらいました。出発時刻が近づくとぞくぞくと日本人参加者がホテルのホールを埋めはじめ、今度はバスに全員が乗れるかと心配になるほどの盛況でした。

最後4台目のバスに満載して送り出し、ほっとしていると、会長Dr. AyalaがこれからMadrid市長との会見が市長舎で予定されているが日本人はみんな大使公邸へ行ってしまったので、残っている私にとにかく一緒に来るようにとIAC会長Dr. Bibboとともに車に乗せられてしまいました。市長を30分も待たしている、と慌てながら市長舎に入ると、もうIACの関係者が十数名待っており、すぐにセレモニーが始まりました。市長舎は十六世紀に建てられたもので、謁見室も周りを大きな壁画で飾った歴史のある広間でした。市長の歓迎の挨拶、それに対するDr. Bibboの挨拶が行われ、そのあと隣のホールでワインを飲みながら歓談と続けました。

しかし、Dr. Ayala, Dr. Bibboが日本大使に挨拶に行かねばいけないと、途中で中座して大使公邸に向かいました。大幅に遅れて公邸に着き、彼らが大使と挨拶をしているとき、私は大変素晴らしい料理があったという話をきかされるだけで、残っていたワインを飲みながら、残っていたエビのてんぷらを数本いただき、帰路のバスに乗り込みホテルに戻ることになりました。ホテルにもどり改めて食事をゆっくりといただきやっと慌ただしかった一日を終えた次第です。 (山内一弘・記)

### 細胞診指導医会会報編集委員会

委員長：柴田 偉雄

副委員長：長谷川壽彦

委員：藤井 雅彦, 垣花 昌彦, 坂本 穆彦, 山内 一弘